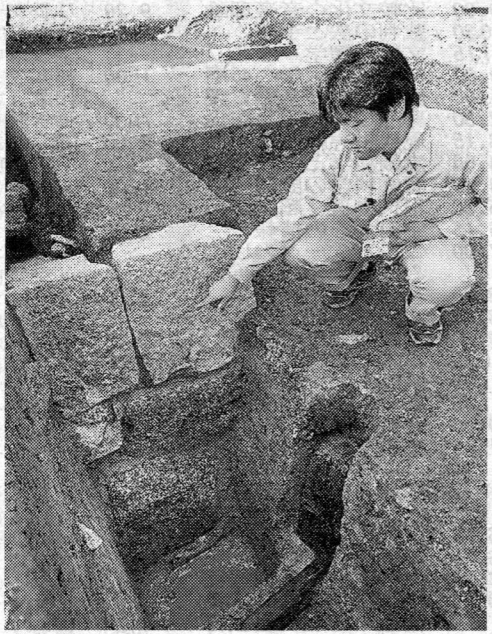
討幕派 京へは通さぬ

設計図通り幕府の台場跡

大阪・枚方の淀川岸

江戸幕府が幕末、淀川に築いた全国で唯一の河川台場「楠葉台場跡」（大阪府枚方市）の遺構の一部が、保存されていた設計図に基づき確認された。枚方市教委などが17日発表した。京都・大阪を結ぶ京街道の経路を変えて台場内に引き込み、関所機能も持たせていた。同市教委は、討幕勢力の長州藩などの京都侵入を防ぐ狙いがあったとみている。（三島庸孝）



台場跡の南側入り口の基礎部分とみられる石積み。門柱の一部（右下）も見つかった＝大阪府枚方市楠葉中之芝2丁目、荒元忠彦撮影

市教委によると、台場は通常、外国船の襲来に備えて海岸部に造られる。楠葉台場は、幕府から京都防衛の責任者として派遣された会津藩主・松平容保が提案し、幕臣の勝海舟が設計した。1865（慶応元）年に完成した。淀川左岸を土塁で囲み、大砲のカノン砲3基を備えていた。東西、南北とも230メートルで面積は約3ヘクタール。

京都府立総合資料館（京都市）に残っていた設計図によると、従来の京街道を東に約70メートル移動させ、台場内を「コ」の字形で通す構造になっていた。市教委などが10月から18カ所を発掘したところ、設計図通りに、南側の入り口「虎口」付近の地中から、石積み（深さ約1・3メートル）の基礎部分と門柱の一部が出土した。地上部の石の表面は磨かれていた。北側出入り口の堀にかかる橋の辺りでも橋脚部分の木材（長さ約3・1メートル、幅15センチ）を発見した。設計図には南北の出入り口を結ぶほぼ中央部分に「番所」と記されており、ここで往来者をチェックしたらしい。

また、設計図と遺構調査の結果から、周囲の土塁は高さ約2メートルだったが、幅は北側が約5メートル、南側は約14メートルと推定された。堀も北側が深さ約1・5メートルに対し、南側はより深い約5メートルだった。大阪から京都方面への侵入を防ぐため、南側をより強固に造っていたとみられる。

楠葉台場跡は現在、水田になっており、京阪本線や府道整備で西側の一部が失われている。市教委は今後、史跡指定を検討する。現地説明会は20日午前10時～午後3時。問い合わせは市教委文化財課（050・7105・8058）へ。

相当な威圧か

千田嘉博・奈良大准教授（城郭考古学）の話　大規模な土塁と堀を築き、美しく加工した切り石を積むなど単なる軍事的な役割だけでなく、幕府の威信を象徴していたことがわかる。関所機能も持たせており、討幕派には相当な威圧になっただろう。